

PRESS RELEASE

泉屋博古館東京 SEN-OKU
HAKUKOKAN
MUSEUM TOKYO

企画展 歌と物語の絵
— 雅やかなやまと絵の世界

Thematic Exhibition

Lyrical and Narrative Paintings —The Elegant World of Yamato-e



2024年6月1日（土）—7月21日（日）

《展覧会概要》

古来、語り読み継がれてきた物語は、古くから絵巻物など絵画と深い関係にありました。和歌もまた、三十一文字の世界が絵画化されたり、絵から受けた感興から歌が詠まれたりと、絵画との相互の刺激から表現が高められてきました。物語絵や歌絵の特徴のひとつは、繊細な描写と典雅な色彩。宮廷や社寺の一級の絵師が貴人の美意識に寄り添い追求した「やまと絵」の様式を継承することでしょう。そして、ストーリーに流れる時間を表すかのような巻物、特別な場面を抽出してドラマティックに描き出す屏風など、長大な画面にさまざまな表現が生まれました。古典文学は、後世の人々が自身に引き寄せて味わうことで、読み継がれ輝き続けてきました。それに基づく絵画もまた同様です。本展では、近世の人々の気分を映し出す物語絵と歌絵を、館蔵の住友コレクションから選りすぐってご紹介します。雅やかで華麗、時にちょっとユーモラスな世界をお楽しみください。

《本展のみどころ》

1. 住友コレクションのやまと絵を一挙公開。

当館が所蔵する住友家歴代収集の日本絵画には、繊細な描写と典雅な色彩を特徴とする絵巻・屏風の作品群が含まれます。それは、平安時代より培われてきたやまと絵の領域が一気にひろがった桃山から江戸時代前期（17世紀頃）のもので、かつて一部の貴人のためだったやまと絵は、より広い階層にむけて一段と親しみやすく視覚効果の高いものへ生まれ変わっていったのです。

2. 知っているようで知らない古典文学。

江戸時代の親しみやすい絵画を通じて、一歩近づく。

江戸時代の人たちだって、みなが全編読破していたとも限りません。挿絵入りのダイジェストやパロディ本も人気がありました。屏風や掛軸には特に印象的な名場面が選ばれ、その時代ならではの好みや解釈も反映されています。それらに親しむうちに、いつのまにか文学の根底にある普遍的な人生の機微に引き寄せられていく――古典文学が読み継がれてきた理由はそのあたりにあるのでしょう。

3. 細部こそ見せ場！高精細画像で心情・風情に迫る。

絵巻は手で、屏風は座敷で、ともに間近に鑑賞されたやまと絵は、細密な描写こそ本領ともいえるでしょう。文化財用高精細スキャナーで撮影した3点の物語絵屏風の拡大画像を会場にご用意します。ガラス越しでは見つけにくい表情や仕草、四季折々の自然など、ひとたび目にすれば古典文学にぐっと近づけることでしょう。

《基本情報》

展覧会名	企画展 歌と物語の絵 一雅やかなやまと絵の世界
会 期	2024年6月1日(土)～7月21日(日) *会期中展示替えあり
開館時間	11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、7/16 (火) (7/15は開館)
入 館 料	一般1,000円(800円)、高大生600円(500円)、中学生以下無料 ※20名様以上の団体は()内の割引料金 ※障がい者手帳等ご提示の方はご本人および同伴者1名まで無料
会 場	泉屋博古館東京 〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1 https://sen-oku.or.jp/tokyo/ TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)
主 催	公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社

《展示構成》（予定）

1. うたうたう絵

和歌とは、人の心に去来した感興を三十一文字の言葉に託して表すものです。そこに欠かせないのが、日本の四季折々の自然、そして人の営みでした。平安時代中頃、和歌の隆盛とともに広がったのが歌絵です。

それは歌の意味からイメージされ、また詠まれた景物を素材として描かれたものです。反対に、描かれた景物に触発されて歌が詠まれることもありました。

歌から絵へ、絵から歌へ——無限の連鎖のなかから新たな芸術は生まれていったのです。

掛詞や見立て、本歌取りなど、和歌は限られた言葉を起点に、鑑賞者の知識や想像の力も借りて最大限の表現にいたる技に満ちています。歌絵もまた、シンプルなモチーフ、機知に富む構図を通じ、古来の言語・造形の積層を紐解きイメージを広げる余地を観る者に与えています。いにしへの画家たちからの一投に応え、私たちはその絵に何を思うのでしょうか。

◇屏風にひろがる歌枕のイメージ

歌枕とは古来、和歌で繰り返し詠まれた地名のこと。実際の景観よりも、数々の和歌のなかで培われたイメージが重視され、名所絵もまたその観念的な世界を描くものでした。今回展示する《柳橋柴舟図屏風》はそういった歌絵の典型例です。

向こう岸に山並みを望む大きな川の流れ、そこにかかる金色の橋。この見渡すような雄大な風景は一般的な川を表すようですが、「川、橋、山に、柴舟、網代木（杭）」と見れば、古来、宇治が連想されました。京都から少し離れた宇治の山里は、古代より寺社がたたずみ、貴族の別荘が営まれました。そこに橋姫の伝説や源平合戦の逸話、さらには「うじ＝憂し」といった地名の響きからの連想まで折り重なって、名所歌枕としての「宇治」のイメージが形成されました。この屏風に描かれているのもそういったイメージの景色です。一見どこでもない普遍的な景観ですが、いにしへの人は瞬時に宇治を想起し、数々の名歌からさらに想像をふくらませたことでしょう。

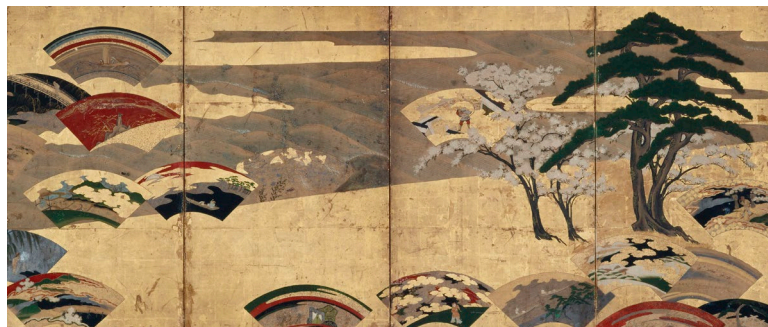


（柳橋柴舟図屏風） 江戸・17世紀 泉屋博古館

◇扇に描かれた和歌——機知に富む解釈、大胆なデザイン

身近に携帯し、時に贈答にも用いられる扇は、小画面ながらもそれぞれにひとつの世界が成立しています。和歌の感動をそのまま絵画化するもの、言葉遊びでわざと意味をすり替えて奇想天外な光景を描くもの。それぞれの小宇宙が、屏風の桜咲く水辺にちりばめられています。

近寄っては機知に富む歌絵を楽しみ、引いては華麗にデザインされた空間を楽しむ——扇面散らし屏風の楽しみは尽きません。

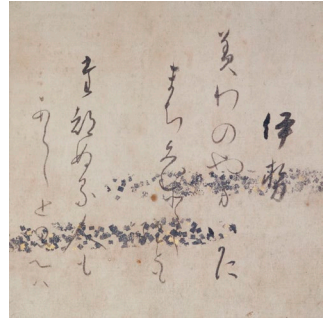


《扇面散・農村図屏風》（右隻） 江戸・17世紀 泉屋博古館

◇神か人かー三十六歌仙の絵すがた

「歌仙」とは歌の神様。古代の和歌の名手を尊崇して称することばで、「三十六歌仙」は平安時代中期に藤原公任がそれ以前の歌人を選んだものとされます。本来、威儀をただした神聖な姿で描かれた歌仙ですが、中世以降、より自由な表現がひろがりました。

江戸初期の文化人、松花堂昭乗による《三十六歌仙書画帖》でも、歌作りに悩んだり、色目をつかったりする人間くさい歌仙が描かれます。寛永の三筆の一人に数えられた松花堂の流麗な書の和歌はそれぞれの歌人の代表歌。あわせて鑑賞すれば味わいもひとしおです。



《三十六歌仙書画帖》(伊勢) 松花堂昭乗
江戸・元和2年(1616) 泉屋博古館

同・柿本人麻呂

2. ものかたる絵

元来、物語文学は「語り」のことばどおり、音読して聞かせることが中心だったといい、早い時期から巻物などに描かれた絵を前に耳と目で味わう楽しみがありました。やがて言葉と書、絵からなる総合芸術となった絵巻物から、冊子、扇、掛物、屏風へと物語絵は広がります。

とりわけ中世末から近世にかけての物語絵屏風は、大画面の特長を生かした装飾的で視覚効果の高い新たな世界を開きます。物語の各場面を一覧するものから、次第に場面数をしぼり、一場面を詳細にドラマティックに描く方向へと展開します。そこでは、場面選択や表現に、当時の鑑賞者の好みを映し出し、また新興の画派たちの創意が注ぎ込まれます。古代中世の見る側の想像の余地をのこした引目鉤鼻から、表情豊かな個性的表現へ——それを可能にするのも、長く読み継がれる古典文学のもつ普遍性のなせるわざでしょう。目を凝らして登場人物になった気分で物語の世界を眺めてみるのも一興です。



《是害房絵巻》(部分) 南北朝・14世紀
重要文化財 泉屋博古館

◇絵巻—ことばと絵でつむぐ物語

古来、語り読み継がれてきた物語は、古くから絵巻物など絵画と深い関係にありました。

「語り」のことばどおり、物語文学は当初、音読して聞かせることが中心だったともいわれます。

巻物に描かれた絵をみながら、耳と目でその世界を味わっていたのでしょう。

多くの場合、詞書と絵が交互に現れる絵巻物は、作り手ではなく、受け取る側の巻き広げるという動作が加わってはいじめて物語が展開します。時には読み手や鑑賞者の心情にあわせ、緩急自在に物語が進行したことでしょう。

本展では、中世の宮廷絵師による活気ある説話絵巻《是害房絵巻》（重文）と、日本最古の物語を題材とする江戸時代の華麗な《竹取物語絵巻》という対照的な絵巻をみることができます。

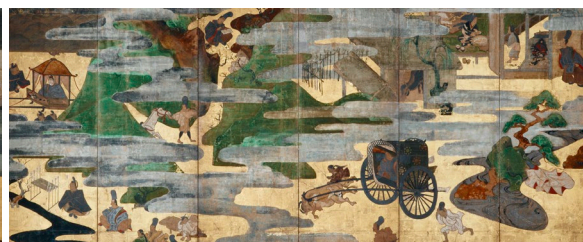
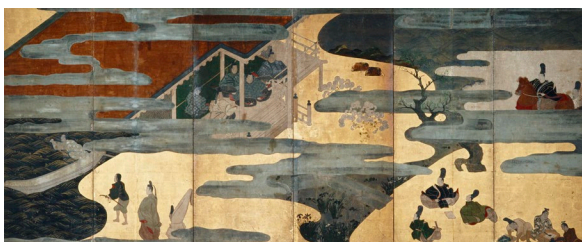


《竹取物語絵巻》（部分）江戸・17世紀 泉屋博古館

◇三大物語屏風 伊勢／源氏／平家—人気の名場面集

平安時代から鎌倉時代にかけて多く生まれた王朝物語や合戦物語のなかでも名作として特に近世に人気のあった三つの物語。この時代には名場面を選んでバランス良く構成したり、画面いっぱいにクライマックスを描き出すなど、屏風という大画面の特徴を生かした視覚効果の高い物語絵が多く生まれました。

この時代に活躍した画派は、創意を尽くして優れた物語絵屏風を遺しています。当館には、画題はもちろん、画派も構成も異なる三作例がそろっています。三者三様のアプローチを比較しながらご覧ください。



《伊勢物語図屏風》宗達派 桃山～江戸・17世紀 泉屋博古館



《源氏物語図屏風》江戸・17世紀 泉屋博古館



《平家物語・大原御幸図屏風》
桃山・16世紀 泉屋博古館

◇心なしか、俗っぽい源氏物語絵

《源氏物語図屏風》では、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「絵合」「葵」「胡蝶」など12場面を金雲で区切って描いています。その配置は物語の流れには必ずしもそわず、むしろ季節や内容など、画面全体として見たときのバランスに配慮されています。

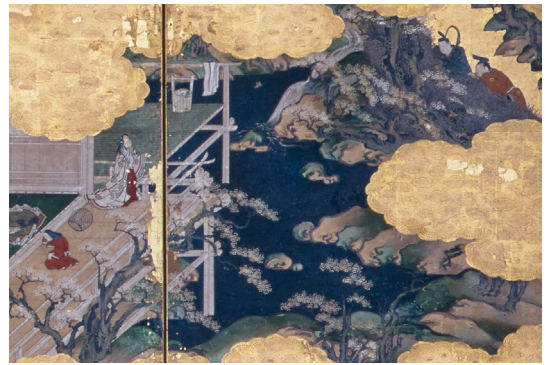
細部の描写も時として原文に忠実とは言い難いものの、形式的に表現されがちな古典文学の登場人物を生身の人間としてとらえているようです。時として野卑な表情をみせる人物描写といい、車争いの迫力ある乱闘シーンといい、この画家が本来、風俗画を得意としたことが想像されます。

窃視（垣間見）や盛大な行事など通俗的な関心をそそる場面が主に選択されていることも同様です。

その描写は江戸初期の風俗画の名手岩佐又兵衛（1578-1650）に近く、又兵衛晩年の工房作と目されています。この源氏絵も、この時代の好みに応えた結果といえるかも知れません。



《源氏物語図屏風》（左隻・部分）
江戸・17世紀 泉屋博古館



《源氏物語図屏風》（右隻・部分）
江戸・17世紀 泉屋博古館

3. れきしがたる絵

明治時代には洋画・日本画を問わず、日本の歴史・神話・仏教主題・伝説を描く「歴史画」が流行しました。画家たちは歴史を正しくかつリアルに伝えるため、時代考証を究め、時に西洋画の技法を駆使して迫真的に描き出すことに腐心しました。歴史画を奨励した岡倉覚三（天心）は、「歴史画は国体思想の発達に随て益々振興すべきものなり」というように、歴史画は近代国家の形成において必要とされ、国家意識や民族意識を養分とし、あるいは西洋絵画における「歴史画」概念の輸入を受けて盛んに描かれるようになります。視覚的に国家の歴史を表す歴史画は、単なる歴史の記録にとどまらず、歴史意識の共有や国民の道徳心を養うために求められたのです。一方で思想を絵画に盛り込むことが求められた近代絵画において、歴史画はそういった抽象概念を可視化する最も適した画題でした。

明治時代の思想家・高山樗牛は「歴史画の本領は歴史のために描くのではなく、絵画のために歴史を借りるのである」と言っていますが、果たして「れきしがたる絵」とは「歴史を語る絵」なのか、あるいは「歴史画たる絵」のどちらでしょうか。



原田西湖 《乾坤再明》
明治36年（1903）
泉屋博古館東京

《貸出可能画像・キャプション一覧》

※屏風片隻使用時は（右隻）（左隻）
部分図使用時は（部分）の表記をお願いします



《源氏物語図屏風》
江戸・17世紀
泉屋博古館



《伊勢物語図屏風》
宗達派
桃山～江戸・17世紀
泉屋博古館



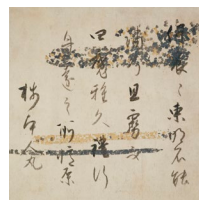
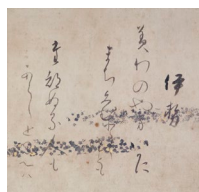
《平家物語・大原御幸
図屏風》
桃山・16世紀
泉屋博古館



《竹取物語絵巻》
(部分)
江戸・17世紀
泉屋博古館

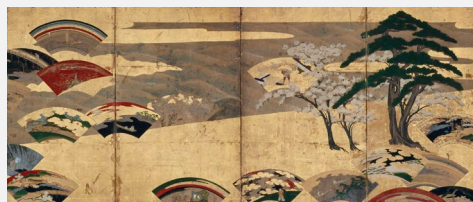


《是害房絵巻》(部分)
南北朝・14世紀
重要文化財
泉屋博古館



《三十六歌仙書画帖》
松花堂昭乗
江戸・元和2年
(1616)
泉屋博古館

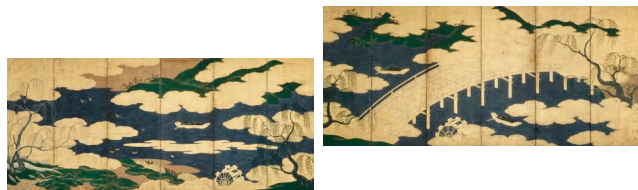
左：伊勢
右：柿本人麻呂



《扇面散・農村図屏風》
(右隻)
江戸・17世紀
泉屋博古館



原田西湖 《乾坤再明》
明治36年（1903）
泉屋博古館東京



《柳橋柴舟図屏風》
江戸・17世紀
泉屋博古館

プレス専用 広報用ダウンロードシステム <https://www.artpr.jp/senoku-tokyo> ▶▶▶

※初回のみ新規ご登録が必要です。



《お問い合わせ先》 泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子 展覧会担当：実方葉子（泉屋博古館 学芸部長）

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail: pr-tokyo@sen-oku.or.jp



泉屋博古館東京

SEN-OKU HAKOKOKAN MUSEUM TOKYO